STRIX Vol. 18, pp. 127-130, 2000

北海道内陸部におけるシロエリオオハムの記録

筒渕美幸[1*]・澁谷辰生[2]

1.帯広畜産大学野生動物管理学研究室．〒080-8555 北海道帯広市稲田町
2.厚岸水鳥観察館．〒088-1136 北海道厚岸郡厚岸町大字大田村字大別2番地3

シロエリオオハム *Gavia pacifica* は，日本に普通に渡来する冬鳥で（日本鳥学会 1974），本州以南では冬鳥，北海道では旅鳥である（中村・中村 1995）．北海道では夏にも少数がみられるが（藤巻 1998），繁殖の有無は不明である．大部分は夏期にロシア極東北部からカナダのハドソン湾にかけての北極海沿岸に渡り，内湾や湖沼の岸で繁殖する（中村・中村 1995）．

本種を含めたアビ科の鳥類は，足が体の後方についており，潜水はきわめて巧みであるが，地上の歩行は適していないため，地上に上がることはあまりないとされている（高野 1994，樋口ほか 1996）．しかしながら，北海道の北広島市と厚岸町の内陸部の道路上におけるシロエリオオハムの保護例があったので報告する．

第1例は，1999年5月11日にて北海道北広島市中の沢の道道790号沿い(42.59N, 141.33E)で筆者の一人（筒渕）が保護した例である．この個体は路側帯にうずくまっていたところを保護された（図1）．齢・性別は不明で，全体的に夏羽の様相を呈していたが前頸斑だけは黒色に近く，夏羽の一般的特徴である黒い青色光沢(日本野鳥の会 1992）は見られなかった．この個体は，帯広畜産大学野生動物管理学研究室に収容され，翌日放鳥された．保護された地点は，最も近い海岸(日本海)から直線距離にして約33kmの石狩低地帯の中央部である(図2)．周囲の環境は山に囲まれた田園地帯であり，時期的に，北への渡りの途中に内陸部を迷行し，何らかのアクシデントのために，やむなく地上に降り立ったと考えられる．

第2例の個体は，1999年5月1日にて厚岸町サッテベツ（43.08N, 144.50E）の道道813号沿いで保護された．この個体（齢・性別不明．羽色は前者の個体とほぼ同じ）は釧路動物園に収容され，翌日放鳥された．保護地点は最も近い内湾である厚岸湾まで約8.5km，外洋(太平洋）まで約20km離れている（図2）．周囲の環境については，記録が残っていないため不明である．

シロエリオオハムの海上からの迷行例は，北海道において記録がなく，比較的まれな事例と考えられる．このような内陸部への迷行の原因の1つに，気象条件が考えられる．北広島で保護される数日前の天気図は，5月7日の午前にロシア沿海州に中心のあった低気圧（7

1999年11月8日 受理

キーワード：シロエリオオハム，内陸部，北海道

* 現所属：北海道厚岸道有林管理センター．〒088-1115 北海道厚岸郡厚岸町梅香町1-26

Fig. 1. A vagrant Pacific Loon in Kita-hiroshima, central Hokkaido, on May 11, 1999.

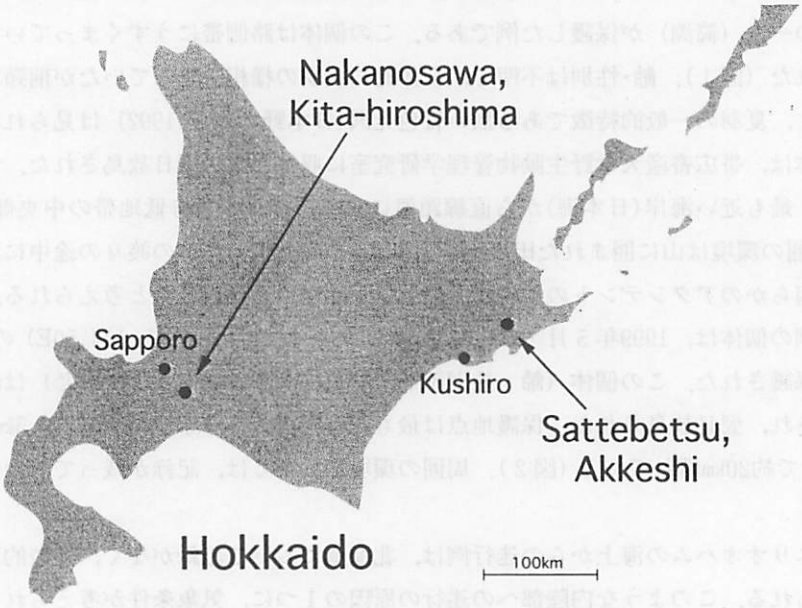

Fig. 2. Captured points of Pacific Loon.

日午前6時で996hPa）が8日の午前にかけて北海道を通過した（北海道新聞1999年5月7日夕刊，同8日夕刊）ことを示している．さらに，この個体を保護した5月7日午前9時の北広島周辺の天候は，雨で気象条件も悪かった．また，厚岸町の場合は，保護される数日前の天気図では北海道東部に大きな低気圧は見られないが，釧路や根室でこの時期としては珍しく雪が観測され（4月28日15時に根室，同日18時に釧路で観測，北海道新聞1999年4月29日朝刊），やはり悪天候であった．以上のことから，保護された2羽のシロエリオオハムは悪天候に影響されて内陸部まで迷行してきたと考える．

謝　辞

本報告をまとめるにあたり，ご指導していただいた帯広畜産大学野生動物管理学研究室の藤巻裕蔵教授，柳川久助手，保護したシロエリオオハムの面倒を見ていただいた帯広畜産大学野生動物管理学研究室の皆さまに深く感謝するとともに，厚くお礼申し上げる．また英文要約をご校閲していただいた北海道大学理学部厚岸臨海実験所のCatharine Winataさんにもお礼申し上げる．

引用文献

藤巻裕蔵．1998．北海道鳥類目録．帯広畜産大学野生動物管理学研究室，帯広．
樋口広芳・森岡弘之・山岸哲（編）．1996．日本動物大百科 第3巻 鳥類I．平凡社，東京．
中村登流・中村雅彦．1995．シロエリオオハム．原色日本野鳥生態図鑑＜水鳥編＞．保育社，大阪．
日本鳥学会．1974．日本鳥類目録改訂 第5版．学研，東京．
日本野鳥の会．1992．Field Selection 8 水辺の鳥．北隆館，東京．
高野伸二．1994．フィールドガイド日本の野鳥増補版．日本野鳥の会，東京．

Records of vagrant Pacific Loons in inland areas of Hokkaido

Miyuki Tsutsubuchi[1]* & Tatsuo Shibuya[2]

1. Laboratory of Wildlife Ecology, Department of Agro-Environmental Science, Obihiro University of Agriculture and Veterinary Medicine, Inada-cho, Obihiro-shi, Hokkaido, 080-8555, Japan
2. Akkeshi Waterfowl Observation Center, 2-3 Ohbetsu, Ohta-mura, Akkeshi-cho, Akkeshi-gun, Hokkaido 088-1136, Japan

In this paper, we give details of the first records in the inland areas of Hokkaido of the coastal seabird, the Pacific Loon *Gavia pacifica*. Two observed individuals were captured. One was found on the road in Kita-hiroshima (42.59N, 141.33E) on May 11, 1999, and another vagrant bird was found in Akkeshi (43.08N, 144.50E) on May 1,1999. We thought that they probably lost their migration route under the bad weather, strong winds and heavy rain.

Key words: Pacific Loon, Gavia pacifica, *inland area, Hokkaido*

* Present address: Hokkaido Akkeshi District Forestry Center, 1-26 Baika-cho, Akkeshi-cho, Akkeshi-gun, Hokkaido 088-1115, Japan